

CPD・CPDS 申請中

講習会のご案内

木材利用技術講習会

～建設事業における各種木材利用技術の紹介～

日時

平成25年

10月30日(水)

13:00～17:00 (受付12:30)

会場

福井県産業会館

本館展示場

福井市下六条町103

◆ 参加費 無料

〈参加資格は設けておりません〉

◆ 定員 200名

〈事前申し込みをお願いします〉

講習内容

13時00分～17時00分

「土木分野における木材の使い方、活かし方」

渡辺 浩 氏 福岡大学工学部社会デザイン工学科 准教授

「近代木橋の技術開発と維持管理」

本田 秀行 氏 金沢工業大学環境・建築学部環境土木工学科 教授

「木材を利用した治山構造物」

高奥 信也 氏 京都府農林水産部森林保全課 野生鳥獣担当課長

「木材の地中における軟弱地盤対策としての利用について」

沼田 淳紀 氏 飛鳥建設株式会社技術研究所 主席研究員

お申し込み方法

福井県建設技術公社ホームページから
<http://www.fk-kosha.or.jp>

定員(200名)になり次第
締め切らせていただきます。

「ご来場の際は、できるだけ公共交通機関をご利用ください。アイドリングストップに御協力ください。」

お問い合わせ：福井県建設技術研究センター 主任研究員 梶村 (TEL: 0776-35-2412)

主催：福井県木材利用研究会、福井県建設技術研究センター

共催：(公財)福井県建設技術公社、(公社)土木学会木材工学委員会

後援：(一社)近畿建設協会

木材の性質

「土木分野における木材の使い方, 活かし方」

福岡大学 工学部 社会デザイン工学科 准教授 渡辺 浩 氏



【略歴等】

平成4年3月 熊本大学大学院 工学研究科土木工学専攻修了
平成4年4月 熊本大学～同大学大学院助手
平成16年4月 福岡大学助教授 現在に至る
研究分野 木材の土木構造物への利用と診断
所属学会 土木学会, 日本木材学会, 日本木材加工技術協会, 日本木材保存協会
社会活動 富山県耐震診断等評定委員会委員長など

木材がかつては建設材料の主役であったことは, 土木の名前にも示されている。しかしながら鋼材やコンクリートの台頭により徐々にその地位を明け渡していった。このような経緯から木材はこれらよりも劣る材料と考えられている面があるが本当にそうだろうか。木材は製造時の環境負荷が小さく, その利用は二酸化炭素の削減にもつながる。豊富な森林資源を有することから, 木材の利用は国を挙げて推奨されてもいる。さらにコンクリートを凌駕するほどの性質も有する。それでもなお利用が低調なのは, 木材の良さがほとんど理解されていないからである。ここでは木材の特性を踏まえつつそれを活かした利用の考え方と方法について解説する。

木橋利用

「近代木橋の技術開発と維持管理」

金沢工業大学 環境・建築学部 環境土木工学科 教授 本田 秀行 氏



【略歴等】

昭和50年3月 金沢大学大学院 工学研究科修了
昭和50年4月 金沢工業大学工学部 土木工学科助手～助教授
昭和63年3月 AVH財団によるミュンヘン工科大学の招聘教授で留学(平成1年6月まで)
平成4年4月 金沢工業大学工学部 土木工学科教授 現在に至る
研究分野 構造工学, 橋梁工学, 土木振動工学
所属学会 土木学会
社会活動 土木学会木材工学委員会委員長, 元土木学会木橋技術小委員会委員長など

明治以後, 木橋は永久橋と言われた鋼やコンクリート系橋梁に架け替えられて来た。では, 今, なぜ「木橋」と言われるのか。また, 木橋の設計, 製作, 施工, 維持管理等の技術レベルはどの程度まで進歩しているのか。近代木橋は構造用大断面集成材を主要部材として用いる点が, 従来の木橋と異なる最大の特徴である。その近代木橋を取り巻く社会環境は, 土木・建築・木材等の各学会や各研究機関, 各種の協会や団体, および木材業界や橋梁メーカーなど多岐に亘る社会から構成されている。言わば, 多種業界の技術の集積が近代木橋の建設を具現化している。本講習会では, 我が国の近代木橋の変遷を概観し, その技術開発と維持管理の観点を論じたい。

治山治水利用

「木材を利用した治山構造物」

京都府 農林水産部 森林保全課 野生鳥獣担当課長 高奥 信也 氏



【略歴等】

昭和58年3月 鳥取大学農学部林学科卒業
昭和58年4月 京都府庁入庁 現在に至る
所属学会 土木学会
社会活動 土木学会木材工学委員会委員

治山・治水分野における構造物は, 森林区域や溪流等の自然環境が豊かなエリアにおいて建設するため, 環境や生態系に優しい循環型資源である木材の利用が拡大している。しかし, 土木工事の中で比較的多く利用されている治山・治水分野においても, 木製構造物に関する歩掛や施工管理マニュアル等が未整備である場合が多く, 土木技術者が木材を利用する場合の障害となっている。今回は木材を利用した治山・治水施設の施工例や木製構造物に適した設計・積算・施工・検査等について紹介するとともに, 京都府が全国に先駆けて開発した木製治山ダムの開発時(1999年)から現在までの取り組みについて報告する。

地中利用

「木材の地中における軟弱地盤対策としての利用について」

飛鳥建設株式会社 技術研究所 主席研究員 沼田 淳紀 氏



【略歴等】

昭和58年3月 中央大学大学院 理工学研究科博士課程前期課程 土木工学専攻修了
昭和58年4月 飛鳥建設株式会社入社 現在に至る
研究分野 地盤工学
所属学会 土木学会, 地盤工学会, 日本木材学会, 日本地震工学会など
社会活動 土木学会木材工学委員会幹事長など

一般に, 土木工事は二酸化炭素排出側にある。しかし, 土木工事を行うことで二酸化炭素削減に貢献する方法がある。木材を軟弱地盤対策などの地盤中の地下水位以下に打設し, 木材を地盤改良材とし地盤を強化する方法である。樹木は, 大気中の二酸化炭素から炭素を固定化している。これを長期的に利用しながら, 健全な林業が行われれば, 二酸化炭素削減に大きく貢献し, 地球温暖化緩和策となる。軟弱地盤対策には, 軟弱粘性土地盤と液状化地盤を対象としたものがある。これらを対策するのにも, 丸太利用は極めて利用しやすい条件が整っている。ここでは, 木材を地中で使用する意義, 具体的な使用事例, 温室効果ガス削減効果について述べる。